

# 四国遍路「お接待」に潜むケアの要素 —— 遍路体験記の分析から ——

高橋 順子

“Osettai” Culture in the Shikoku Pilgrimage  
— An Ethnonursing analysis of the Shikoku Pilgrimage Experience —

Junko TAKAHASHI

## ABSTRACT

### Objectives

This study aims to analyze the elements of emic caring in the “Osettai” culture.

### Method

Excerpts relating to “Osettai” were extracted from 11 travel documents written by 11 pilgrims who completed the Shikoku Pilgrimage. All literature was published after 2000. Text mining was applied to analyze the scenes.

### Result

493 descriptions about “Osettai” from the 11 travel documents were analyzed. “Osettai” contained the following elements of emic caring. 1. Volunteer watches pilgrims carefully and provides necessary supports. 2. “Osettai” culture causes pilgrims to be impressed over people in Shikoku. 3. Through “Osettai”, the host person also takes part in pilgrimage. 4. “Osettai” encourages pilgrims to find their inner changes and to thank others.

## I はじめに

四国遍路に関しては、これまで歴史学・宗教学・社会学・民俗学・地理学・社会心理学・運動生理学など、さまざまな視点から研究がなされてきた。中でも「お接待」と呼ばれる、地域住民が巡礼者（遍路）を歓待する習俗は、他地域の巡礼にはあまり見られない特色ある民俗として関心を集め、その本質的な意味に関する研究が主に歴史学・社会学・文化人類学の観点から行われてきた（（新城，1979）（前田，1972）（浅川，2008）など）。

新城常三は「近代の四国遍路とお接待」（1979）において、文献史料を基に、江戸時代のお接待の特徴を、提供物品・無料宿泊所（遍路屋・遍路家）・接待者の観点から分析している。前田卓は、『巡礼の社会学』（1971）において、四国の人々のお接待の動機や個人接待の特徴、接待品と納札について分析を行い、さらにお接待の社会的拘束力、集団接待である接待講、乞食遍路、病気遍路とお接待等につ

いて、歴史社会的視点から検討している。

その他にもお接待に関する研究は多く、歴史的変遷や現状を報告・考察したものがある（（愛媛県生涯学習センター，2002）（豊島，2000）（藤沢，1997）など）。浅川泰宏は文化人類学の立場からお接待を四国四県の共通文化と位置づけ、お接待は四国遍路の「日常的実践」となっていると論じている。

「お接待」は、四国遍路1400kmの随所で接待者（地域住民）が遍路者にさり気なく支援の手を差し伸べ、励まし、元気を与え、遍路継続への力を与える必然性が高い巡礼者支援であり歴史が育んできた文化である。

民族看護学の研究を進めた Madeleine M .Leininger (2006) は、人の行動は、それぞれ、その人が持つ文化的なものによって成り立ち、その文化的なものは人の心の健康にも影響を及ぼしていることに着目した。そして、様々な文化の中にある特有な「民間的ケア」は人々を癒したり助けたりする特別な意味や効果を持ち、文化の中で人から人へと伝承

され学習されていることを明らかにした。人々の文化に合ったケアの提供こそ、看護の本質と考え、人々に安寧をもたらしている「民間的ケア」について「ヒューマンケアの慣習は人間の歴史が始まった時からすべての文化に存在していた」と述べている。

1200年の歴史を持つ四国遍路は、四国八十八か所1400kmの行程を歩く旅であり、遍路者は、予期できない自然や遍路ころがしと言われる難所、数十キロにおよぶ単調な遍路道での孤独との戦いなど誰もが肉体的にも精神的にも追いつめられ、自問自答を繰り返す日々を経て結願に至る。

この遍路過程を支えるのが四国の人々による「お接待」である。遍路者にとって、遍路中の「お接待」は、心身共に癒され元気づけられ、遍路継続への勇気と闘志を養う必然性が高いケアである。そこで、遍路文化が育んだ「お接待」を Leininger がのべる「民間的ケア」と位置づけ、ケアの視点から分析する。

## 2 調査目的

個人の遍路体験をつづった出版物（以下 遍路体験記）の「お接待」に関する記述から、接待者と遍路者の相互関係にケアの要素がどのように関連しているかを探る。

## 3 方法及び内容

1) 調査期間 2010年5月～11月

2) 分析対象 2000年以降に出版された徒歩による遍路記のうち、通し打ちで遍路した著書11冊について「接待状況」が記述されている場面を抽出し、その内容分析を行った。

3) 分析方法 テキストマイニングを用いて接待場面の言語を分類し基礎的集計を行った。著者と接待者、接待場面についてはクロス集計で $\chi^2$ 検定、統計処理はSPSS17forWindowsを用いた。著者の心理的变化については、遍路者が自覚する「自己への思い」を抽出し分析した。

4) 内容 (1) 接待の状況 ①接待者、②接待場所・場面、③接待の内容、④接近者、⑤接待場面における気持ちの表現、(2) 11事例の記述内容を継続的に

比較しその変化をとらえた。

## II 結果

### 1 「遍路体験記」の概要

著者11名の概要を表1に示した。性別は、男性9名、女性2名、年齢は15歳から62歳と幅があり、10代と20代及び50代は各1名、30代3名、60代5名であった。1番札所から88番札所までの遍路日数は、34日1名、42日～48日5名、51日～57日5名であり、1月半から2ヵ月間かけて徒歩遍路が行われていた。

遍路に出た理由は、「定年退職を機に、以前より魅力を感じていた歩き遍路をしたい」「充実感を味わいたい」「自分を取り戻したい」「精神的な不安を振り払いたい」「妻の供養」「自分を変えたい」「漠然とした期待感」「芸を磨きたい」など様々であるが、全員「四国遍路は自分に何かをもたらしてくれる」という期待感をもって歩き始めている。

11冊の遍路体験記の「お接待」に関する記述は、493場面である。一人の記述場面数は21件から72件と差があった。記述状況を四県で区切ると徳島（発心の道場）169件（34.3%）、高知県（修行の道場）115件（23.3%）、愛媛県（菩提の道場）127件（25.8%）、香川県（涅槃の道場）82件（16.6%）で遍路開始の徳島県が最も多く、最終地の香川県が少ない。通過札所別に記述数を比較すると23番札所通過時の記述数は50件、37番札所通過時は28件、次いで64番札所18件、他に多いのは12番、22番、38番、65番、88番札所であった。

### 2 「お接待」の概要

1) 接待者については578名の表記があった。最も多いのは、「おばさん・大人の女性」116名、次いで、「おじさんや男性」の106名、成人接待者の合計総数は346名であった。「おばあさん・お婆ちゃん」は88名、「おじいさん・お爺ちゃん」が25名、年寄24名で、高齢接待者の合計総数は137名であった。「子ども」では小学生が多く登校・下校中のあいさつに癒されていた（表2）。

2) 「お接待」の内容は703件であった。飲食が最も

表1 事例の概要

タイトル	年齢	性別	日数	場面数	動機
1 15歳のお遍路。元不登校児が歩いた四国八十八カ所	15	男性	57日	23	親父と歩いた1ヶ月は本当に充実していた。四国から東京に帰る途中、自然と、いつか一人で歩いてみたいと言う思いがこみ上げてきた『歩くついでに、久美の心臓が治るようにお祈りしてきたら？手術しないで心臓の病気が治ったら、それが一番と思うしね』と母の言った言葉が、ぼくの背中をぼんと押した。
2 平成娘巡礼記	24	女性	44日	54	盲目の彼女たちが、恐ろしく苦しい旅に耐えて、知らない町や村の知らない家の前でひく三味線、歌うごぜ唄は、哀切だけでは、片付けられない必死さ、懸命さがある。その必死さを表現するには、都会の暖房のある部屋でごぜ三味線をひいてはいけない。それでは分らない。私は「めをつぶすことはできないがせて『塗方にくれる』旅に出よう。その旅のなかで『ごぜ三味線をひいてみたい』と思った。芸道の悩み
3 88の折り 四国歩き遍路 1400キロのたび	33	男性	51日	50	私はまともな表現活動をしていなかった。あの映画以来8年が経っていた。あの時の充実した感覚、表現する喜びを再び味わいたかった。私は表現することに飢えていた。それは、渴きにも似た欲求だった。大切な何かを失ってしまった自分を取り戻すには歩かない。歩きながら感じることや体験をすることを何らかの方法でほぼ同時に表現したい。
4 私のお遍路日記一歩いて回る四国88カ所	33	女性	45日	72	会社から独立した。フリーの仕事をすると変わると思ったが今一つ変わらない。お遍路に行くはっきりとした理由は見つからない。漠然とした自分の中の気持ちを感覚を何とか形にする跟前記のようなことになる。本厄数えの33歳、「これは厄落とししなければならない」という思いに駆られたのも事実は。女33歳本厄
5 四国霊場徒歩遍路	38	男性	48日	21	精神的な不安を振り払うため徒歩遍路に出る。人を信じることを放棄してからうじて残されている仕事で食いつなぎ、夢見ることもない「生きた屍」のような暮らしそんな日常生活に限界を感じ始めたころ。遍路のことが気になり始めた。
6 お遍路さんと呼ばれて四国1200キロ歩き旅	52	男性	51日	64	30年の新聞記者生活に終止符をうった。定年まで勤めると新たなことを始める気力、体力がないかもしれない。いったんリタイヤして、遍路に出てから人生をリセットしよう。全行程を歩き通すことで何かが見えてくるのではないかな。
7 歩きお遍路 一千里の道も一歩から 出会い旅 分かれのたびを虫送る	60	男性	53日	35	平成4年頃から時々「写経」しているがいつのから「お遍路」のことをかかんできるようになったか自分でも分からない。自然にお遍路に結びついたように思う。9月出発
8 諸君！お遍路はいいぞ	60	男性	42日	41	旅行が好き。学生時代、30代に四国を旅。将来歩き遍路をしようと決めた。退職後作家に挑戦しそれまでは違う人生を歩きたい。..自分発見の旅
9 ひょいと四国のお遍路へ	60	男性	55日	44	定年退職が人の加齢に伴い「知力、体力、気力」が衰えてくるので、自分とそれまでの仕事を引き継ぎ社会的に設けられた制度だという事を、実感として分かってくるようになった。体力、気力がそんなに衰えているのか自分で確かめたくなった。その格好の舞台が四国遍路のような気がして、挑戦してみようと思った。
10 四国八十八カ所 一期一会 歩き遍路一人旅	61	男性	48日	52	妻を三年前にがんで亡くした。その翌年定年を迎えたが、それまで典型的な会社人間であった私は、五里霧中の中にいた。四国八十八カ所霊場ツアーの募集をしていたので応募した。参加、歩き遍路をしてみたいと思った。妻の4年目の命日を四国の遍路で迎えるのも供養、入院中の妻の姉の夫の安寧を祈って四国への3月1日出発
11 四国は心のホスピタル 遍路の旅で見えてきたもの	62	男性	34日	37	第一の理由：険しい山道や峠越え、そして気が遠くなるような海辺の果てしない道を唯ひたすら歩き続ける難行・苦行になぜこれほど多くの人が人々が魅せられ駆り立てられるのかこの目で見てみたい。第二の理由：私もいつかは四国を歩いてみたいと言う漠然とした気持ちが、次第に歩いてみようと言う強い気持ちに変わり、定年と言う一つの区切りを期に編路地を思い立ったわけである。付け加えて腰痛の克服である。

表2 接待者の構成

接待者	n578 人	小計	%
おばさん女性	116		
おじさん、男性	106		
中年の人	47	346	59.9
おかみさん・ご主人	55		
店の人、店員、おくさん	22		
おばあさん、おばあちゃん	88		
お爺さん、おじいちゃん	25	137	23.7
年寄り老人	24		
住職、納経所の人	39	39	6.8
小学生・幼い子	22		
中学生	9	34	5.9
高校生	3		
若い男性・おにいさん	5	17	2.9
若い女性。むすめさん	7		
若い人	5		
遍路路保存協会の人	5	5	0.9

多く204件（29%）、次いで「言葉・挨拶・応援」の93件（13.2%）、道案内75件（10%）、お金の接待49件、宿の接待40件の順であった（表3）。

3）「お接待」を受けた場所は、「路」194件（41.2%）・札所、境内、札所71件（15.2%）、宿69件（14.7%）、店や直売所34件、家・庭31件の順であった（表4）。

表3 接待の種類

内容	n703 件	%
飲・食	204	29
言葉・あいさつ、応援・激励	93	13.2
道案内・地図	75	10.7
お金	49	7
宿・無料。割引	40	5.7
心遣い／好意・配慮	32	4.6
場所の提供・トイレ、休憩風呂	27	3.8
遍路についてアドバイス	25	3.6
生活用品	25	3.6
話相手・会話	17	2.4
見送り	16	2.3
笑顔	16	2.3
洗濯	16	2.3
乗り物	14	2
へんろ路道/境内の清掃、整頓	11	1.6
ボランティア	4	0.6
合掌	2	0.3
他	37	5.3

表4 接待の場所

場所	n468 件	%
路	194	41.2
礼所、境内、番所	71	15.2
宿	69	14.7
店・直売所	34	7.3
家、庭	31	6.6
食郷・喫茶店	23	4.9
接待所	15	3.2
公共施設。小・中・公園・郵便局など	12	2.6
畑／田	4	0.9
他：バス停、駅ホーム、浜辺	15	3.2

表5 「お接待」時の接近者

書籍名	接待者 件	遍路者 件	合計 件	
1 15歳のお遍路 -元不登校児が歩いた四国八十八カ所-	21	95.5%	1 4.5%	22
2 平成娘巡礼記	28	51.9%	26 48.1%	54
3 88の祈り -四国歩き遍路1400キロのたび-	36	72.0%	14 28.0%	50
4 お遍路さんと呼ばれて - 四国1200キロ歩き旅 -	48	75.0%	16 25.0%	64
5 諸君！お遍路はいいぞ - 四国歩き遍路その魅力と巡り方 -	31	83.8%	6 16.2%	37
6 私のお遍路日記 - 歩いて回る四国88カ所 -	57	80.3%	14 19.7%	71
7 ひょいと四国のお遍路へ - 千二百キロの歩き旅 -	28	63.6%	16 36.4%	44
8 四国八十八カ所 一期一会歩き遍路一人旅	40	76.9%	12 23.1%	52
9 四国霊場徒歩遍路	10	47.6%	11 52.4%	21
10 四国は心のホスピタル 遍路の旅で見えてきたもの	22	61.1%	14 38.9%	36
11 歩きお遍路 - 千里の道も一歩から -	25	71.4%	10 28.6%	35
合計	346		140	486
	71.2%		28.8%	100.0%
Pearson のカイ 2 乗	値	自由度	漸近有意確率 (両側)	
尤度比	31.885 <sup>a</sup>	10	.000	
有効なケースの数	33.184	10	.000	
	486			

4) 接近の方向について、接待成立時の接近者をみた。「近づいてくる」の表現がない場面では、お接待が何かの代価として生じた場合（例えば店・宿・納経所における金銭の一部返却、三味線をひいたお札など）は、遍路者からの接近とした。接近者が判断できる486件中、接待者からの接近は346件

(71.2%)、遍路者からの接近は140件(28.8%)であった。遍路者別の比較では、優位差が認められた( $P<0.01$ ) (表5)。

### 3 事例にみる遍路者の心理的变化

遍路記の記述から心理的な変化が生じた記述を取

表6 巡礼者の気持ちの変化が記述されている通過札所

書籍名	徳島県	高知県	愛媛県	香川県
1 15歳のお遍路 元不登校児が歩いた四国八十八カ所	11・19・20・23	27・38		78・86・88
2 平成娘巡礼記	7・23	38		88
3 88の祈り 四国歩き遍路1400キロのたび	12・23	27. 37. 39	45.52	67.88
4 私のお遍路日記-歩いて回る四国88カ所-	5. 10. 11. 18	24. 26. 39		81.88
5 四国霊場徒歩遍路	23-24	36.37	49	78・88・1
6 お遍路さんと呼ばれて 四国1200キロ歩き旅	5. 11. 12. 17	23-24. 37. 39		66.88
7 諸君！お遍路はいいぞ	39		40.45	65. 84. 88. 1
8 ひょいと四国のお遍路へ			52	88.1
9 四国八十八カ所 一期一会歩き遍路一人旅		23	42.48	88.1
10 四国は心のホスピタル 遍路の旅で見えてきたもの		23-24	43	88.1
11 歩きお遍路 -千里の道も一歩から-		26		77. 85. 88

出し、その内容を比較した。高知県（修行の道場）は10名、香川県（涅槃の道場）における記述は11名全員が行っていた。60歳以上の巡礼者5名は徳島県での記述がなく、高知県に入った後に自分への関心や思いを記述していた（表6）。

遍路者の心理変化「遍路の動機や理由、自分への気づき、自己変化の自覚」について、遍路の経過にそって2事例を示す。

1) 事例1 15歳の少年、中学校に入学後不登校となる。2003年初めて四国に行き「お遍路」の存在を知った。遍路への同行をきっかけに、相談学級への通学を始める。2004年の夏、四国八十八カ所歩き遍路に挑戦、1400キロの道のりをテント、寝袋、ノートパソコン等を背負い、野宿を中心に歩き通す（岡田、2005）。

#### 遍路の動機・理由

遍路を始めた理由については、「親父と歩いた1ヵ月間は本当に充実していた。四国から東京に帰る途中自然と、いつか一人で歩いてみたいと思った。...中略...お遍路をしていると皆が口をそろえて聞いてくることもある。『どうして歩き遍路を始めたの』自分でも理由がわからないのに、それを言葉にして伝えるなんてとうてい無理な話だ。」と述べ、四国遍路に魅力を感じているが、その理由は自分でも不明瞭なまま遍路を始めている。

#### 気持ちの変化

（徳島県）少年は、12番所に向かう道で、飲み物を持たずに歩く男性に出会い「このままではおじさんの命に係わる」と感じて自分のお茶を手渡した。

その時の様子を「『ありがとう』おじさんの一言にハットさせられた。今まで人からもらいっぱなしだった。初めて人に物をあげた。困っている人を助けた。この人として当り前の行為が東京にいた時の自分ではできなかった。」と表現し、感じたことを行動に移せた自分の変化に気づいている。

20番札所では「台風が近づいて危ないから泊まってください」と声をかけられ2泊3日の、お接待を受けた。宿を提供してくれた女性から「よかったら、私の分も一緒に回ってくれないかしら？」と言われる。...中略...今まで巡礼する意味を明確に見出せないまま、歩いていたのだが、この約束で大きな意味ができた。自分を助けてくれた人の気持ちも一緒に連れて巡礼をする。...中略...僕は一人ではない。たとえ一人で歩いていてもそこには服部さんや皆の思いが一緒にいるのだ。最後まで歩こうという気持ちだが、この日強くなり大きくなった。そして、今初めて気づいた。今までお接待は人助けだと思って受けていたのだが、そうではなくて、お接待を通して、みな僕たちお遍路さんを応援してくれているんじゃないだろうか、と」少年は、お世話になった人の為に歩くという、目的を得て歩く意欲を持つようになる。また、「お接待」を受けてあげる意識から、応援してもらっている意識に変換できている。

（高知県）24番札所から27番札所まで同行した写真学校の学生遍路、ニックネーム小鉄との別れの場面では「あと数時間でお別れだというのに不思議と寂しさはなかった。なぜだろう。自分でもわからないけど、たぶん巡礼を始めたことで、僕も少し大人

になったのだと思う。…中略…小鉄と過ごす残りの時間、盗めるだけ写真の技を盗んでやるぞ、という心構えでいることにした。」ここでは、現実を受け入れられるようになった自己の成長にも気づき、事象を前向きにとらえる方法を見つけている。

巡礼30日目、歩こうという気持ちすら沸いてこない。中だるみのことを教えてくれた老人の言葉を思い出す。「解決法はただ一つ『自分をあまやかすこと』だそうだ。『毎日自分の体に鞭打って歩いているのだから、たまには自分を甘やかしてあげないと体がもたないぞ』ある物事が今の自分にダブって見えた。僕の不登校、あれは、小学校から中学校まで6年ちょっとの間頑張っていた僕への無意識の甘やかしだったのかもしれない。…中略…現実はお遍路優先、今やらないと意味がないのだ。…中略…よし、気合が入ってきたぞ！」少年は、自分の状況の中だるみと判断して、脱皮する方法を確認、また、不登校であった過去の自分を客観視することができ、今は遍路を続けることが自分には必要と自ら決定している。

(香川県)「憂鬱だ、78番札所郷照寺のベンチに腰かけて休んでいると、フツフツとこの感情が湧き上がってきた。78番を打ち終えて残りは10番、この53日間、いろいろなことがあった。東京の生活では体験できないことばかり、野宿をしたり、山で遭難したり、数えきれないくらい貴重な体験してきた…中略…一人の人間として、劣等感を持たずに大人と接することができるようになった。…中略…自分で判断して行動することができるようになった。」ここでは、遍路の過程を振り返り自分の成長を実感し、憂鬱の原因を探っている。

しかし、結願の日を迎え、迷いが生じ、悩んだあげく先に進むことをやめ「お遍路交流サロン」に行く。そこで、記名ノートに、遍路過程で出会った人々の名を見つけた。結願して四国遍路の旅に区切をつけようと心を決め、女体山を登りきる。そこは、息をのむ絶景である。「この景色を見ていて朝から考えていたことの結論が出た。答えはまだ出さなくてもいい。時間をかけてゆっくり探せばいい。そして『願いがかなうか』なんて僕は根本的な考え方を

間違えていた。神頼みだけで願いがかなうほど世界は甘くない。願いをかなえるためには、行動が大切なのだ。…中略…四国八十八カ所は力をため込み夢に向かって突き進むための『修行の場所』なのだ。」と結論を出し、他人のためにと思っていた四国遍路が自分の未来に続く体験と意味づけられるようになる。

2) 事例2 38歳男性、フリー写真家。精神的な不安を振りはらう為、テントとカメラをかついで、48日間の四国遍路に出て、四国八十八カ所の魅力をカメラに納め、四国霊場徒歩遍路として発表する(小野, 2002)。

#### 遍路の動機・理由

人を信じることを放棄してかろうじて残されている仕事で食いつなぎ、夢見ることもない「生きた屍」のような暮らし、そんな日常生活に限界を感じ始めた頃、四国遍路に興味を持つ。「四国遍路一人歩き同行二人」を購入しバーチャル徒歩遍路を体験、1ヵ月半写真にほうける生活を楽しみに遍路にでる。

#### 気持ちの変化

(徳島県) 寺での「お通夜」、「遍路ころがし」など初めての経験を繰り返し、足の痛みと闘いながら遍路を続ける。21番所から22番所に向かう途中では、道路わきの「廃宿」で野宿をする。「初めて、なんで、こんなにシンドイ旅を選んだのだろうか」という後悔が頭をよぎる。

(高知県) 24番札所に向かうバス停で野宿「道路に縞模様を作りながら叩きつける土砂降りの雨を見ながら一瞬『馬鹿な旅をしている』そんな思いが心をよぎる。準備と帰ってからの整理を含めると3ヵ月は仕事から遠ざかることになる遍路旅。ご多分に漏れず出版界も不況で、東京に帰ったらかろうじてつながっている今の仕事も別の誰かがこなしていないとも限らない。時間を使い、お金を使い、揚げ句には仕事も失う。そこまでしていったい何がつかめるといふんだ。言い知れぬ不安が僕をおそった。」著者は、四国遍路を決意し歩き始めたものの、予想を超える身体的苦痛、将来の見通しもない不安感に自問自答を繰り返している。

37番札所から38番札所に向かう途中、大岐海岸の

景色の素晴らしさに魅せられて、早起きをして朝日を浴びながら砂浜に向かう。「急ぐ必要もないのに足が勝手に動いている。焦っているのではなくはしゃいでいるのだ。... 中略...『僕は元気です』そんな幸福感に満たされていた。」また、長い遍路道を振り返り、「37番札所・岩本寺から38番札所・金剛寺までの90キロの行程もいよいよ終わろうとしている。23番札所・薬王寺から室戸岬を經由して24番札所・最御崎寺を目指す80キロの行程も確かに苦しかった。その時は不貞腐れながら歩くこともしばしばだった。今回の行程は何か違っていた。足の痛みが軽くなったからか？それとも太平洋沿いの美しい景色が心の支えになったからか？いや、もっと内面的な何かかわりはじめたのかもしれない。」この頃には、前向きに遍路の旅を続けられるようになり、自分の気持ちに変化が起きていることに気づき始めている。

(愛媛県) 46番札所浄瑠璃寺でお通夜をお願いする。「生きている環境も世代も異なる3人がシラフの中で思い思いに凍えている。それがまたうれしい。」「僕は、今、四国遍路を歩いている。他人によって不愉快に曲げられた人生だが、今度は自分の判断でより大きく曲げる人生を選び、小声ながらそれを楽しんでいる。失ったものにすぎたのではない。もっと大切に大きな何かを凍りついた心を溶かし始めている。」人間不信に陥り、他人と距離をとってきた著者が、野宿を共にする他の巡礼者と交流できるようになり、プラス思考へと変化し始めた。

(香川県) 85番所の境内で、「歩き始めは病気を治してくださいという『お願いの旅』でした。今は... 中略...『感謝の旅に』になりました。」と屈託のない笑顔で話す女性遍路と出会う。「問題の具体的な解決を期待する人には、遍路は迷信にすぎないが気持ちの変化に気づいた人は、毎日に希望が持てるし、その希望は少しずつではあるが現実を変え、問題を解決していくのではないだろうか。僕自身も何か変わった実感はある。」

結願し1番札所に向かう途中、「やっと今頃になって胸が熱くなってきた。柔らかな春の光の中で『草や木や鳥や風や雲にすらも僕は生かされている。』

一瞬涙腺が緩む。深呼吸しながら細胞一つ一つに今の心のざわめきを刻み込むとしよう。」生きた屍のような暮らしに限界を感じて、四国遍路に出た著者は、「失ったものにすぎたのではなく、もっと大切なものがある。自分自身は生かされているのだ」と気持ちを変化させることができた。かけがえのない体験を実現させてくれた札所や沿道の四国の人々への感謝のことは、エピローグで述べている。

#### 4 接待者の状況

接待者の「お接待に対する反応や理由」を記述した場面数は、59件であった。その内訳は、高齢者35件、成人23件、子ども1件であり、その内容は5項目に分けられた。「大師信仰」30件(46.8%)、「応援・支援」11件(18.6%)、「話し相手」8件(13.6%)、「共有共感」6件、「接待のお返し」4件であり、高齢者は多い順に「大師信仰」「話し相手」「応援・支援」であり、成人は「大師信仰」「応援・支援」「共感・共有」の順であった(表7, 表8)

表7 接待理由記述対象者の構成

接待者	度数	%
高齢者	35	59.3
成人	23	39.0
子ども	1	1.7
合計	59	100.0

表8 接待の理由

理由	度数	%
大師信仰	30	50.8
話し相手	8	13.6
共感・共有	6	10.2
接待返し	4	6.8
応援・配慮・支援	11	18.6
合計	59	100.0

具体的な内容としては、(1) 大師信仰「お遍路さんを家に泊めていると私も歩いてみたくなるのよね。私もお父さんも足を悪くしちゃってね。もう歩いて四国を回ることはできそうにないのよね、よかったら私の分も一緒に回ってくれないかしら」「お遍路さんを乗せると一緒に八十八カ所を回っている



図1



図2

気分がするんだよ」「お大師さんに助けられた」など。(2)応援・支援「熱射病にならないかと思って」「ホームページを楽しく見ている」「外は危ないから宿に泊まりなさい」「若いうちにやろうと思ったことは何でもやっておきなさい」など。(3)話し相手『「いやうちの婆さんは7年前に亡くなったんや」その言葉を皮切りに老人は関を切ったようにしゃべりだした』『お遍路さん急ぎのところ年寄りの愚痴を聞かせ、えらい足止めをしてくまなんだ』と頭を下げた。おばあちゃんもお遍路ならば世間体を気にせず、日頃の鬱憤をぶち撒けたかったのであろうとしばし話のお付き合いをした」など。(4)共感・共有「両親もお遍路を経験しているし、自分も車で2度まわった」「旅の途中で何度も思ったけど、1人じゃないんだよね。お大師さんが必ず一緒にいるんだよね」「私も通しじゃーないがけど歩いたことがあるがき、歩きお遍路さんの大変さはようわかるがで」など。(5)接待返し「私の弟が60歳でいるんだけど今歩き遍路をしているの、見てると他人ごととは思えなくて」「お孫さんにして頂いた身も知らぬ方からのお接待のお礼を誰かに返したい」「子どもさんが遍路でいろいろお世話になったお礼で始めた」などであった。

### Ⅲ 考察

#### 1 一般的ケアの概念

ケアは看護や介護の分野で業務上の用語として使用する言葉であるが、一般社会においてもスキンケア、ヘッドケアなど生活に密着して使用される言葉である。ケアの一般解釈として辞典をみると、『ジーニアス英和辞典』（大修館書店、2006年第4版）には、「名詞 ①世話、介護、保護、管理監督、②細心の注意、用心、③心配、気苦労、気がかり、不安、懸念」とあり、『広辞苑』（岩波書店、2008年第6版）には、「①介護、世話、②手入れ」と記載されている。

つまり、日常的使用としては、細心の注意をはらって、保護したり、気にかけてたり、心配することであれば、対象・場面、場所の限定をすることなく広く「ケア」と表現できる。

一方、ケアの研究者に影響を与えた Mayeroff (1971) は、「一人の人格をケアすることは、最も深い意味でその人が成長すること、自己実現することをたすける、また、ある人が成長するのを援助することは、少なくともその人が何かあるもの、または、彼以外の誰かをケアできるように援助することにはかならない。…中略…その人が自分自身をケアすることになるように援助すること」と述べている。つまり、ケアとは、相手の人格をケアする行為



で、相手が自分自身を、ケアできるように支援することであり、その人の成長を促し、自己実現を助ける行為としている。

Leininger (2006) は、「ケアとは、人間の条件もしくは生活様式を改善したり、高めようとする明確なニード、あるいは予測されるニードを持つ個人に対して行われる援助的行動、支持的行動、あるいは能力を与えるような行動にかかわる抽象的・具体的現象を意味する」と述べているが、遍路者は心身共に限界を感じ、自分と闘いのさなかに「お接待」に助けられ元気をもらい、1日1日を積み重ねて前に進んでいく。また、「お接待」は信仰心を根底にして、長い歴史の中で、四国の人々の日常生活の中に組み込まれ、行為に対する気負いもなく、自然な支援活動として受け継がれている。

## 2 「お接待」に見るケアの特徴

### 1 ケアの成立過程の特徴

ケアの成立には、ケアの対象を認識し、情報をとり、相手が求めているニードについてアセスメントすることが必要である。そして、求めに応じた行為が検討され実践される。

接近の方向が判断できる「お接待」場面486件における接近者の割合は、接待者からの接近が346件(71.2%)、遍路者からの接近は140件(28.8%)であった。四国遍路は地域文化として生活の中に根付いているため、四国の人々には、白装束に身を包む遍路者は弘法大師の分身として、幼少期から身近な存在である。誰もが、自然に、世代を超えて、支援の対象として認識している。

接待者は、遍路者を見つけると、その様子に気を配り、迷わず札所にたどり着くように見守り、援助の必要性を察知して『『そっちゃない。手前から登るんや』と家の前から教えてくれる』『分岐点で迷っていると『右だよ』とおばあちゃんが教えてくれた』等とさりげなく道案内が行われる。また、「トラックに乗ったおばさんが窓を開けて声をかけてきた。』『朝ご飯食べた～?』『これ食べてえ～』とおむすびを二つ、鞆から出してくれた。』『門前の店でポテトチップと河童えびせんを買って、わびしい昼

食にする。『これ』と店のおばさんが奥から出てきて手招きをする。』『『たいしたものじゃないけど、途中で食べて』とおむすび3つとミカンを渡された』等の記述からは、生活の場である道路や店の前など日常生活感覚で構えることなく、遍路の健康に配慮したお接待が行われている様子がうかがえる。

相手が何を求めているか注意深く観察し、思い図って行動する。そこには、情報収集、アセスメント、問題抽出、実践のケアのプロセスが成立している。成長過程で日常的に遍路者に接しているため、抵抗感がなく、遍路者の行動予測も自然に学習していると言える。

宿の女将の心遣いにも、健康への気配りがある。「お遍路さんが一番ありがたいのは、ゆっくりとしたお風呂、ボリュームのある美味しい食事、そして清潔な寝具、これを私の真情として、精一杯のことをさせてちょうだいておるがで」「若奥さんがお昼のおにぎり2個とバナナ、みかんをくださった。ここから室戸岬までは、お店が1軒もないからとの心遣いだ」など遍路者の心身を元気づけるお接待である。

愛媛県生涯学習センター『遍路のこころ』によると、宝暦13年(1763)甲斐国(現山梨県)木喰上人の『西国四国巡礼手引』に四か村で強飯のお接待を受けたことが記されており、四国遍路における「お接待」は時代を超えて伝承されている事が分かる。

現代の歩き遍路は、食いぶちを減らすための旅ではない。四国遍路についての準備期間を設け情報を集め、ある程度の経済的準備を整えて四国遍路にしている。しかし、八十八カ所巡りに要する費用は安くはない。費用が掲載されている事例の場合、純粋に遍路にかかる費用は、テント中心の歩き遍路で254,000円、全てを宿に泊まる場合、主に民宿で389,000円である。このほかに交通費、準備費用等の10～20万円が加わるため、退職などで経済的にゆとりのある遍路者以外は、簡単な食事で済ますことが考えられる。

また、善根宿、宿泊券、個人宅など宿を提供し、遍路者の安全を守り心と身体の疲労を癒している。

食事と睡眠は、人間が生きていくために必要不可欠の要素であるが、遍路者の反応にも「有難い、ありがとう、感謝」の表現が108場面（全記述の32%）あった。結願時には全員が、「四国の人々に見守られた」と実感していることから、「お接待」の支援すなわちケアの力は大きいと言える。

## 2 「接待者」側から見る「お接待」というケア

「接待者」側に立って「お接待」をみる。「お接待」場面に表記された接待者578名の構成は成人男女346名(60%)、高齢者137名(24%)、次いで住職、納経所の人39名、子ども34名であり、遍路記作成時に心に残っているお接待の提供者は「おばさん・おじさん、おばあちゃん・おじいちゃん」がその大半を占めている。2007年推計人口総務省統計による年齢別構成比は15～64歳は徳島61.8%、比率が低い高知県は60.2%、65歳以上は徳島で25.5%、高知県27.2%である。日常生活の一部として行われるお接待は、出会う機会が多い成人期からの提供が最も多く、その構成は人口比と類似していると言える。

接待者側に焦点をあてた状況把握として、遍路記にある接待者の言葉の59場面を抽出した。「お接待」の理由は大師信仰30名(51%)、応援・支援が11名(19%)、話し相手8名(14%)であり、接待者自身もお接待することに意味を見出している。Mayeroffは「他の人々の役立つことによってその人は自身の生の真の意味を生きているのである。この世界の中で私たちが心を安んじていられるという意味において、この人は心を安んじて生きているのである。それは、支配したり、説明したりしているからではなく、ケアし、かつケアされているからなのである」と述べているが、「お接待」における接待者と遍路者の関係は、まさにMayeroffの「ケアの本質」に即した状況といえる。

具体的には、「何の見返りも求めず親切で泊めてくれる」「何の見返りも求めずスッと渡してスッと消えていく」「若者の立ち去る姿愛おしく同向二人の遍路道」「人から無条件の親切を受けるのは本当に久しぶり」などがあげられるが、接待者は何の気負いもなくお接待をおこない、遍路者は「無償の支援」に感動し涙を流している。その感動は、遍路者

を勇気づけ、遍路継続への意識を高めている。そのことが接待者の喜びとなり徳となる。

## 3 遍路者の自己実現過程

遍路開始時の遍路者は、これから始まる未知の1400キロ徒歩遍路への不安、想像以上の肉体的試練に負の心理状態にある。札所を重ねるごとに対処能力もまし、お接待に助けられながら、自己の変化に気づいていく。遍路者の気持ちの変化を「気づいたレベルか、変化として認知しているか」で分けて比較した。多くの遍路者が、客観的に自分を見詰め始めるのは、23番札所・薬王寺から室戸岬を経由して24番札所・最御崎寺を目指す80キロの行程である。その大変さを遍路者は次のように表現している。

「室戸市に入ったが人家等全くなし。時々行きかうトラックや乗用車だけ、右手は山、左手は太平洋で幾つも数え切れない岬を巡っても先が見えない。全くの孤独の中では、路肩にアスファルトの隙間から可憐に咲いているすみれの花、毎日耳にする鶯の鳴き声は唯一沈んだ心をいやしてくれ、思わずすみれに『ありがとう』と言っている自分に苦笑する」「いろいろな人に支えられて歩いている。一体何のために毎日疲れ果てるまで歩くのか。空海は何を伝えたかったのか、その答えはあるのだろうか、正午過ぎ発心の道場から修行の道場に入る。ここまでも十分に苛酷できついものがあったが、さらなる試練があるのだろうか。」など。遍路者は延々と続く変化のない遍路路で、苦しみ、自問自答を繰り返し、時に投げやりになりながら自分に問いかけている。

「お接待」記述場面で最も多いのが23～24番札所であり、お接待の有り難さを実感する行程でもある。

修行の道場は誰にも平等に辛く、自問自答の場であり、変化を意識する道程でもある。52歳男性は37番札所経過時「生きるってどんな事、どう生きるのが後悔しないやり方か」、33歳男性は、「足を引きずるほど険しいと言う事から足摺岬の名がついた。まさにその通り、ただ無心に歩き、足の猛烈な痛みを耐えている」、38歳男性、39番札所を経過「失ったものにすぎるのではない。もっと大切で大きな何か凍りついた心を溶かし始めている」など、四国遍

路が自己の内側に深くかかわり、巡礼者の成長を促し、自立へと導いていく。結願時には全員が当初の目的を達成し自分に素直になり、四国の人々に感謝していく。

自己意識について、清水（2002）は、人間の認知過程における意識状態を「意識の階層構造」として3つの階層に分けている。「第1は目覚めている状態（覚醒）最も基礎的な生物学的である。第2は何か特定の対象や出来事に気づいている状態（アウェアネス）である。第3は自分が意識していることに気づいている状態（自己意識）であり、自分自身の意識そのものを対象とする再帰的な（自己を取り込んだ形の入れ子構造）自己意識が最も高次の認識である。」としているが、遍路者は自己の限界に挑戦する遍路の過程で自問自答を繰り返した結果、結願時には、「生かされている自分」に気づき、自分を取りまく総てに感謝できる状態にある。つまり、清水の唱える自己意識の最高の状態に至ると考えられる。

#### IV 結論

四国遍路に伴う「お接待」を「民間的ケア」ととらえ、その特徴を見た結果、次のことが分かった。四国八十八カ所の歩き遍路における「お接待」は、大師信仰の宗教的社会的要因をベースとして成立しているが、遍路体験記の「お接待」場面には次に示す「ケアの要素」が含まれていた。

1. 接待者は、遍路者の行動を「注意深く観察し、必要な配慮・支援」を行っている。
2. 「お接待」は、遍路者に四国の人々に「見守られ、助けられたという実感」を与えている。
3. 「お接待」を通して「接待者自身」も思いをはたしている。
4. 「お接待」は遍路者が「自己の変化に気づき、感謝に至る過程」を支援する。

#### 5.5 おわりに

本稿では遍路文化が育んだ「お接待」を Leininger がのべる「民間的ケア」と位置づけ、11名の遍路記

の接待場面を抽出してケアの要素をみた。その結果、「お接待」には、長い歴史の中で学習され伝承された、巡礼者に対する注意深い観察と配慮が行われていることが明らかになった。遍路者は無償のお接待に励まされ、素直に感謝する心呼び起こし、遍路を途中で放棄せず、先に進める力を得て結願に至っている。今回は、「お接待」文化の中にあるケアの要素を見たが、今後は、「民間的ケア」としての構造化を試みる課題が残っている。

本論文は、徳島大学大学院総合科学教育部プロジェクト研究Ⅱ報告書「お接待の心— 遍路体験記から —」を基本に修正した。

#### 引用・参考文献

- 1) 秋元海十（2004）：『88の祈り—四国歩き遍路1400キロの旅』東京書籍，p.254.
- 2) 浅川泰宏（2008）：『巡礼の文化人類学的研究—四国遍路の接待文化』古今書院，p.457.
- 3) 今西広（2006）：『四国八十八カ所 一期一会歩き遍路一人旅』新風舎，p.197.
- 4) 愛媛県生涯学習センター編（2003）：『遍路のこころ』愛媛県生涯学習センター，pp.1-40
- 5) 田光永（2005）：『15歳のお遍路 元不登校児が歩いた四国八十八カ所』廣済堂出版，p.239
- 6) 小野庄一（2002）：『四国霊場徒歩遍路』中央公論新社，p.172
- 7) 金田 正（2006）：『四国は心のホスピス 遍路の旅で見えてきたもの』新風社，p.222.
- 8) 川本隆史（2005）：『ケアの社会倫理学 医療・看護・介護・教育をつなぐ』有斐閣，p.367.
- 9) 櫻井史朗（2007）：『諸君！お遍路はいいぞ』新風舎，p.254.
- 10) 佐藤光代（2005）：『私のお遍路日記 歩いて回る四国88カ所』，西日本出版社，p.296.
- 11) 清水寛之（2002）：「第11章 自己の状況とメタ認知」，井上毅・佐藤浩一編著『日常認知の心理学』北大路書房，p.198.
- 12) ジュリア・B・ジョージ，南裕子・野嶋佐由美・近藤房恵訳（2009）：「マデリン・M・レイニンガー」『看護理論集 より高度な看護実践のために 増補改訂版』日本看護協会出版会，pp.373-389.
- 13) 菅原恵（2003）：『歩きお遍路千里の道も一歩から』同友館，p.251.
- 14) 月岡祐紀子（2002）：『平成娘巡礼記 四国八十八カ所歩きへんろ』文芸春秋，p.223.

- 15) 筒井真優美 (1993) : 「ケア／ケアリングの概念」『看護研究』26(1), pp.2-13.
- 16) 津田文平 (2005) : 『お遍路さんと呼ばれて 四国1200キロ歩き旅』東洋出版, p.249
- 17) 豊島和子 (2000) : 「四国遍路にみる『接待』の一考察」『関西外国語大学研究論集』71号, 関西外国語大学, pp.201-214.
- 18) 新城常三 (1979) : 「近世の四国遍路と接待」『日本仏教史学』15号, pp.1-22.
- 19) 藤沢真理子 (1997) : 『風の祈り-四国遍路とボランティアリズム』創風社.
- 20) 前田 卓 (1971) : 『巡礼の社会学』ミネルヴァ書房, pp.217-276.
- 21) Madelein M. Leininger, 稲岡文昭監修 (2006) : 『レイニンガー看護論 文化ケアの多様性と普遍性』医学書院, p.261.
- 22) Milton Mayeroff, 田村真・向野宣之訳 (2008) : 『ケアの本質-生きることの意味』ゆるみ出版, p236.